

## 新しい登山形式の試みと将来ビジョン

大 蔵 喜 福（南信州山岳文化伝統の会顧問 日本山岳会）

厳冬のデナリ峰で命を奪われた仲間3人の魂に呼ばれ、30年間続けたデナリ気象調査は、その原因究明に役立つだけでなく、周辺に居住する人々の生活に影響するデータとして利用してもらうために、コロナ禍の'20年秋アラスカの研究者3名とまとめ“History and data records of the automatic weather station on Denali Pass(5,715m)1990-2007”として『Journal of Applied Meteorology and Climatology』に提供しひと区切りを付けた。'14年デナリ国立公園局の中に気象班が生れ、レンジャー達がデナリ観測を続ける仕組みが出来て、私は'19年の30周年を機に、調査の一線を引くことができた。次にやりたいことはすでに決めてあった。

### なぜ始めたか？『エコとレンタルテント』の発想

以前から温めていたこととは、デナリ登山の多くの経験から北米のような『世界水準の“エコ登山”を南アルプス南部で実践し、その活動を世界に発信、サステナブル登山のメッカとしたい』というプランである。そこは私の生まれ故郷、信州伊那谷の飯田から東に約50km、南北に連なる伊那山脈を越えた“遠山郷（旧上村・南信濃村）エリア”で、三つの百名山、赤石岳、聖岳、光岳が座す。国立公園に指定されて半世紀余り、さらに'08年には中央構造線エリアとして日本ジオパークに、'14年にはユネスコエコパークに指定され、'18年には過去登山道として利用されていた遠山森林鉄道軌道敷跡が日本森林学会の林業遺産に認定されるなど、近年その大自然は広く注目され始めていた。

遠山郷側は三つの百名山に至る登山口から稜線まで、営業小屋、トイレという人工物は一つもなく、アプローチから静岡県側の山小屋までの登行距離・時間と標高差は、営業小屋のひしめく北アとは歴然の差である。人工物もひと氣もない長く単調な登山口までのアプローチ、登山口の標高は数百mから1,000mと低く、高度差は稜線まで1,400m以上、聖岳を例にとれば頂きまで2,000mも登らなければならない。そこには氷河期のレリック（遺物）、ライチョウやハイマツ、高山植物の群生するお花畠と原生林生い茂る深い森、幽谷、様々な動物、鳥、蝶や虫が息づく素晴らしい大自然が展開されている。

この自然を守ると同時に、今まで登れなかつた高齢者を含む多くの愛好家に“見て、聞いて、嗅いで、触って” 大自然を学び知る事を体験してもらいたいという思いが第一の理由である。自然はヒトが入らないと荒れ、食物連鎖が正常に働かないところは、動植物のバランスが崩れ、何か一つ欠けただけで、絶滅の連鎖が起き自然は瓦解に向かう。南アルプスでは現在、シカの食害が顕著で高山植物は瀕死の状態にある。そのためにシカ柵で植物を保護（例：奥聖岳、聖平、薊畠）したり、裸地における椰子網での土壤保護、植生環境保持など、人の力で自然再生を図る努力が連綿と続けられていることも知ってほしいのである。柵内では高山植物が確実に蘇っている。国内におけるライチョウの存続維持、縄張り死守も人の多大なる努力の結果、絶滅を免れている素晴らしい実態もある（例：北岳のライチョウ夜間檻保護）。

とくにこれからの人類を背負っていく子供たちに

## 2. 登山界の現状と課題

はなおさらのこと、自然からの乖離を払しょくし、地球温暖化による氷河消滅、洪水、山火事、砂漠化、凍土溶解など二酸化炭素諸問題、複雑怪奇な新型コロナウィルス問題など、人類がヒトの快適の為だけに自然界をいじめてきた歴史を学び、その反省に立って、病んでいる地球を救える人材になってほしいと願うのは、大人達の期待である。自然教育には登山がなものにも勝ると考えたい。山は自然の母、地球の造山運動がなければ川も生まれないし海も出来ていない。現在の義務教育には自然の歴史をしっかり教えるカリキュラムがないことを危惧するのは私ばかりではあるまい。

南ア南部の特徴に、大森林に覆われた山という表現がある。遠山郷は過去、大正から昭和にかけての一時代、大財閥などの資本に翻弄され、村の共有林が皆伐の憂き目にも合うが、1,500m以上の山腹（現国有林）には、今でも幹周囲4～5mもある原生林ヒノキ、サワラ、クロベ（ネズコ）、ナラ、モミが林立する。この原生自然とライチョウ、多くの固有種を含む高山植物など氷河期のレリックを包括する大自然を保全し、次世代に残す活動は、人と自然界が近い将来の共生を模索するのに欠かせないものである。とくに登山者は自然界の代弁者・理解者・保護者としてのその使命を果たさねばならない。そういう意味でも、このエリアでの“エコ登山”は『何もないを生かすという逆転の発想』から、小屋の代わりに国や自治体から借地した場所に『レンタルテントによる常設テント場』を開設し、老若男女が無理なく安全に登山ができるようにし、得られる体験から“自然を学ぶ姿勢”を養ってほしいと願うものである。また排せつ物はテントブースを用いた携帯トイレでの持ち帰りを徹底させることで、人の出すゴミ（糞尿）による自然への直接的な影響から動植物を守ることの大切さを学べる。わざわざ持つて下る

という行為は、自然に対する礼儀と共に、意識を変えるという大義があるからだ。人の持つ病原菌等が自然界にどう影響を与えるかいまだわからないことも多いからである。

こうした発想には、大きな費用をかけずに、必要な場所に設置されたテントを登山者がかわるがわる使用することで、それぞれが持ち込む負担をなくし、自然への負荷も軽減できるという一石二鳥をも生む。登山者は個人装備以外、必要な水と食料そして燃料のガスカートリッジ、携帯トイレを持参するだけでいい（コロナ禍ではスリーピングバッグも必携）。誰でもが楽で安心な登山が可能になり、今まで諦めていたこの山々に高齢者や子供たちの手が届くようになったといえる。

注) テント場は年間約7ヵ月常設で5月上旬から11月下旬まで。

①易老岳経由の光岳コース；易老渡より易老尾根の下部、面平

②聖岳コース；西沢渡を渡り右へ東沢寄りの旧営林署造林宿舎跡地 ①②共に3人用テント10張り、スタッフテント2張り。

各テント付属品；大型前室付きフライシート、テントマット&40mm厚ウレタン全面敷、ガストーブ&クッカーセット+フライパン、ストーブ台

※①は市有地を借地、②は国有林を借地 いずれも特別許可にて(株)南信州観光公社が借り、(一社)南信州山岳文化伝統の会が管理する特別レンタルテント・キャンプ場のため、登山者が持ち込みのテントを張ることはできない。レンタルテントの利用のみ。

### 登山は観光事業？

今まで地元では、登山者の少ないと理由に、各季節における遭難対策や指導、登山相談や発信は殆ど行わずに来た。観光協会は登山口までのアプローチ道と駐車場情報、二次交通のタクシー、登山届と通り一片。ビジャーハウスもなく、登山者の集う所はどこにも設定されず、ビジネスにならない事には

深入りしないとした感があった。登山道整備も消極的で、素晴らしい観光素材としての登山を見直そうという意識も薄く“南ア南部の自然と山”をまったく利用して来ていない。学校登山で戦後数十年、現在50～70歳代が中学生だった時代に聖や兎、大沢岳と登ったと聞くが、年代によっては「頂上を見たこともない……、登山者も見たこともない」「ロープウェイも山小屋もないこんな山奥に観光客は来ない!! クマが出るだけだ」と取り付く島もない無関心さである。

山小屋があれば集客のため、関係者の努力次第で登山客を呼び込むことはできるが、明治20年代後半のウエ斯顿から大正・昭和にかけての冠松次郎をはじめとする著名な登山家が度々訪れても、北アルプスとは真逆の“自力登山”がことさら強調され、観光とは相いれない世界が出来上がっていた。当時は山案内人も少なく、昭和に入って活躍した多くが首都圏の大学山岳部などである。こうして登山スキルの高い経験者向き山域というイメージが定着した。いずれにしても都会からは大変な距離と時間がかかるエリアで、大衆向きな登山として認知されるのは、時代も下り、’50年代に入って静岡国体の登山競技の山として披露されるまで、一般的とは言えなかつた。

当時の遠山郷は戦前、戦争資材に用いる予定で、ヒノキやスギの伐採搬出用に施工された遠山森林鉄道が、皮肉にも戦後の復興に役立ち、瞬く間に林業的一大産地となって、杣人や林業関係者が、全国から流入した。その隆盛は人口が3倍近くの8000人にも膨れ上がるという賑わいで、当時の森林鉄道員や林業関係者は「仕事と食うことによつたく困らなかつた」と回想している。’55年（昭30）に遠山川本谷の西沢渡まで林鉄が延ばされ、景気は20数年間続く。

生活の道、仕事の道、そして登山の道としても重宝されたが、林業隆盛の時代に登山を観光として意

識する感覚は無かつたようだ。’68年（昭43）安価な外材に押され国産材の需要も傾いたころ、営林署が林鉄から撤退し、’73年には最後の民間業者も撤退。軌道跡は村道として車の走る道となって約20年ほど維持されたが、やっと’70年代に山腹道に軽四輪の走る比較的安定した道が確立されると、水害に弱い川沿いの軌道敷は忘れられ、廃道に近い状況が続く。’50年代から60年代の南アルプス遠山郷側のアプローチはすべて林鉄軌道であった。『歩くことだけで暮らしを立ててきた最後の日本人』といわれる急傾斜に暮らす下栗集落は、簡易水道と電気が通ったのが’56年（昭31）、センターラインのない車道ができるのが’70年代後半から80年代にかけてである。

## 差別化とビジネススキームをどこに

元より世界レベルの隆起速度（年4mm）の南アは複雑な地形と崩れやすい地質、山塊の一つ一つが巨大で上り下りが辛い、傾斜もきつく直線的、道標も少ない。北アのような派手な岩山や尖塔もなく、アルプス的要素はないと断言しても過言ではない。それゆえ人気がなく“静寂と自然に浸れる素晴らしい”を謳うしかなかった。地味な自己責任の登山はそれなりにスキルの高さが求められ、ゆえに単独行者が多い。災害による風倒木も他の山域に比べ圧倒的である。マイナスイメージから脱却する切り札は、中緯度温帯の山で、“わざわざ厳格”に『エコ登山』を施行するというスタイルと決めたのである。

さて、山小屋は、登山を楽しむ者にとっての三大困りごと、登山道、水場、トイレをすべて解決してくれる便利で必要な施設であり、また医療や救助活動など安全登山においても欠かせない存在、ゆえに北アや八ヶ岳のビジネススキームはわかりやすい。だが、登山者が極端に少なく“お金の使えない山、南アルプス”は、自然そのものに包まれて登るとい

## 2. 登山界の現状と課題

う登山である。水災害に見舞われれば、アプローチにあきらかな支障が生じ、通行禁止にでもなれば誰も来ない。『高いサービスの営業小屋は成り立たない山域』なのである。その分自己責任冒険登山として自由で楽しみは多いので、その向きには人気があるが、ビジネスのスキームはどこにも見当たらない。トレイルランニングのある若いアスリートは、急坂の直上ルートが短く速く登れて好きらしく、芝沢ゲートに駐車する車を出発して9時間ほどで光岳を往復する。彼らの仲間にはそのくらいの猛者は多いようで、易老尾根から光岳往復がトレーニングに最適と言ひ放つた。彼らは車で宿泊、食事は持参、落とすのは排せつ物とゴミだけ。登山者の範疇からは外れる。

そう考えてくると高齢者の百名山コンプリート組が最大のビジネススター<sup>ゲット</sup>といえる。幸いなことに赤石、聖、光岳この三山は、非常に多くのリスクが遠山側、静岡側に存在する山域で、災害、高巻き道の危険、テント泊生活一切の重量……高齢になってからでもそれを越えるスキルと体力が要る。最後となった山は、通常何年も待たされることが多い。ツアード來たコンプリート組で頂上まで頑張った70代半ばのご婦人は、身勝手なマイペースで下山時に大変迷惑した。負ぶわれて遭難状態であることも棚に上げ、災害で4年待ったことが原因として自らの為体を正当化するという破廉恥さには閉口した。百名山のコンプリートは、それだけの高額なツアーを組み、個人ガイドで丁寧懇切に対応するのが一番良い方法と思う。やり方次第であるが、レンタルテントを利用してポーターや食事を含めたテント泊の生活一切を面倒見る登山とすれば、ビジネススキームとしては分かりやすい。冬期登山もガイドさんの腕次第で稼ぎは広がる。ちなみにレンタルテントのシステムは活動の主体となる(株)南信州観光公社・(一社)南信州山岳文化伝統の会のHPにアクセスを。

### 地域振興に本気!!

このプランは、私が最初に地元に提案してから足掛け17年“登山観光の復活で、地元に貢献できる地域おこし”への挑戦もある。

南ア・赤石山脈最南部、聖岳、光岳周辺の山域は、遠山側にても静岡側にても殆ど限界集落に囲まれている。一般的に言って秘境といわれている山域、最も山深く最も登り辛い3,000m峰聖岳、それに続く世界のライチョウとハイマツの南限である光岳、地味なラストフロンティアである。深田百名山愛好家達が最後に残すことの多い面倒な山々でもある。台風や豪雨災害で林道が決壊すれば数年は機動力も使えず、縦走路以外は営業小屋もない環境。本格的なエコ登山を遂行するにふさわしい。私は仲間と共に一般社団法人南信州山岳文化伝統の会（'19年9月設立登記）を立ち上げ、会の顧問として目的に向かい活動をはじめた。

一昨年は台風災害で崩れたままの林道に機動力は無力、延々と歩く登山者も稀な静寂の世界で、原生林にクマやシカ、イノシシ、サル、ワシ、タカの猛禽類達だけが幸せに生きる世界だった。登山者の入山はなんと年間800人弱。槍、穂高、燕岳や白馬なら最盛期の1日分にも満たない。とても観光とは言えないレベルである。

そんな不人気の山域で、私は地元遠山郷、南信濃・上村（下栗）そして飯田市の志高い方々の力を借り、今は昔、遠山森林鉄道の発着場梨本停車場に年間数千～1万人の登山者、自然愛好家を迎える赤石山脈唯一の登山基地構想を目標としている。最終的には自然学習プログラムのある本来の意味でのビジャーハウスを備え、登山者の利便（情報の提供、リーズナブルな宿泊、シャワー、ランドリー、食堂、登山用具レンタルショップ完備など）も市井の力で確保したい考えだ。国内の登山愛好家は元より、世界中

からのインバウンド登山者、子供から高齢者の愛好家すべてに満足いく登山をしてもらいたいという思いからである。エコと共にガイドやポーターも利用できるシステムで、複数の登山パターンを選択でき、個人装備だけでも登れるイノベーションと言ってもよい。

山小屋がいらないエコ登山の柱は、前記のように小屋の代わりをするレンタルテント・キャンプ場である。国有林、自治体の所有地を特別にキャンプ地として借地。必要期間のみ常設されたテントを使用してもらうことで、登山者の負担をなくし、さらに自然への負荷も減らせるというローインパクト登山である。

'19年の秋よりここ遠山郷地域を、世界水準の「エコ登山」をブランド化する勢いで突っ走ってきたが、世を席巻するコロナ禍という存在が、ある意味味方になったような気もしている。長雨や台風といった災害も來たし、思う以上の温暖化でヤマビルの攻撃にも辟辟したが、森林鉄道軌道の登山道への再生、完成後のウォーキングツアーの実施は2本ともキャンセル待ちの大盛況である。何もないを活かすエコ登山のレンタルキャンプ登山のファムトリップでは、大いな賛同を得、営業もかけないのに、多くの予約が入った。密を避けるために一人1テントだが、やつた甲斐が見えた。一応の成果をこの短期間で出せたことは望外の幸運である。すでに林業も廃れ、第一次産業も従事者が減り、広大な地域の現人口1,500人をどう維持するか、高齢者社会でできる改革は、新しく流入するIターンに託すほかない。登山を核とした文化融合のおもてなし観光で、感動を覚えてもらうしかない。ゆったりと時間をかけた暮らすような旅をすることで、インバウンドをまた国内のリピーターの獲得を目指す。いざれはスイス・ツェルマットのような登山ガイドの山都を作りたいと思ってい

る。これは遠山郷の林業に続く第2のIターン、人口増への未来ビジョンである。

最終的にはエコツーリズム推進法に則り、地区的自治体が核となり、地域住民や民間団体と共に推進協議会を設けて、自然環境保全や地域振興、環境教育推進の目的をもってエリアを定め、保護の理由やゴミ放置の禁止、排泄物持ち帰り、立ち入り禁止区域の設定など、独自のルールを盛り込んだ「全体構想」を作成し、環境省他の認定を目指している。認定が頂ければ、自治体は構想に基づく条例の制定が可能、ペナルティを取ることが出来る。

今後は南アルプスのシカ対策や、高山植物の再生にも力を注ぎたいと思うし、そのためにも着地型ツーリズム、登山用地産地消食品、百名山コンプリートツアーなど実践したいことは山ほどある。



西沢渡レンタルテント・キャンプ場



面平レンタルテント・キャンプ場